

会 誌

第五十号

平成 30 年 12 月

大阪市立大学大学院医学研究科

分子病態薬理学教室 同窓会

近況の報告

山本 研二郎

薬理学教室から近況について何か書くように依頼されたので、過去2年程のものをコピーして送ってもらった。それを見てびっくりした。何と毎日の生活にほとんど変化がない。

火曜日はタクシーで JR の鳳駅から天王寺。都ホテル5階で12時半からロータリークラブに出席、昼食が楽しみ。午後は近鉄百貨店でゆっくり買い物。喫茶店で一服して JR で帰ってくる。

水曜日は午後1時から堺アゴーラホテルで油絵の会。2時間半は少々長いが、今描いているのは季節はずれだが“又兵衛桜”冬に桜はおかしいが、筆がおそいので時期はずれになってしまった。

金・土曜日は肥後橋の朝日会報へ行く。いろんな講演を聞いて、帰りに南海高島屋の9階で食事をするのが楽しみ。御堂筋のイチョウに季節を感じる。

パジャマのまま部屋に居るのは良くないと思うが、毛糸のジンベを着てみかんを食べるのが小さい幸せ。

四天王寺大学にお世話になり 5 年目を迎えております。結構、長い期間であったように感じております。今年の仕事をつり返ってみました。残念ですが研究と教育のことが、ほんの少ししか思い出せずしております。養護教諭志望の学生たちに久しぶりに薬理学を教えました。そもそも養護教諭に薬理学の何を分かってもらえば良いのかを手探りで試行錯誤しました。鎮痛解熱薬しか飲んだことのない多くの学生には実感の伴わない勉強になってしまいます。将来に医療に携わる学生とは全く違うようです。

看護学部の設置

2018 年の 3 月末に文部科学省に看護学部の設置認可申請書を提出し、8 月末に設置認可を頂きました。準備期間が短く、教員の確保、実習施設の確保が大変でした。市大医学部の先輩後輩に大変お世話になり感謝いたしております。宗教法人四天王寺の下に、学校法人四天王寺学園と社会福祉法人四天王寺福祉事業団があり、四天王寺大学は学校法人四天王寺学園に含まれます。看護学部設置にあたり、四天王寺福祉事業団の四天王寺病院はじめ多くの施設の全面的な協力を頂きました。それでも、実習施設の確保は非常に大変でした。

4 年制の看護学部は大阪府 13 校、兵庫県 12 校、奈良県 3 校、和歌山県 1 校、京都府 7 校、滋賀県 1 校の関西地区には全部で 37 校すでに存在し、全国的には平成 10 年は 63 校、平成 20 年 166 校、平成 30 年 263 校と、この 20 年間で毎年 10 校ずつ急増しています。その影響で教員の確保が非常に困難で、教員の売り手市場になっており、本人の自己評価と客観評価とのずれが大きく苦慮することがたびたびあります。それでも教員を集めなければならないので根気のいる仕事になります。4 月に開学した後も心配です。もう一つは、学生の募集です。定員の充足には不安はありませんが、今後の学生募集のためには 4 年後の国家試験の合格率を 100%にする必要があります。少しでもできる学生に来ていただきたいと広報活動を行っております。近鉄、南海、地下鉄、阪急などの車両に宣伝広告を見かけられたと思います。どれほどの費用対効果があるかわかりませんが出来ることはやっておこうと考えております。看護学部の建物も急ピッチで完成に向け建設中で 2019 年 2 月には完成する予定です。シミュレーション教育用のモデルの進化は素晴らしく、1 体が約 1500 万円以上し、種々の病態を模擬演技でき、声を出したり、胸郭を動かしたり、涙を流したり、心音・脈拍を自由に病態に合わせて作りだすことが出来ます。大阪市立大学医学部のスキルス・シミュレーションセンターを見学させていただき、医学部の学生教育現場も見学でき大変参考になりました。

約 20 年前に大学院設置認可申請のために書いて以来、看護学部の講義と養護教諭 1 種免許に関わる課程認定用の教員調書と業績書を久しぶりに書きました。研究論文の日本語の要旨や担当した内容も必要です。免許に関わる課程認定用の業績書にはシラバスに対応した内容の記述が必要です。独特の書類ですのでストレスがかかります。保育所・幼稚園、小学校、中学校、高等学校の先生になるにはそれぞれの資格が必要です。そのために大学で教職課程の科目を履修し、教育実習を行い修了する必要があります。この中で、知識以外にも話し方、板書の仕方、教え方、教室運営などなどを学びます。しかし、大学の教員になるには何の資格も問われません。昔から不思議に思っていたのですが、この程度の書類で認めていただけるのなら良しとしないと罰が当たると思います。

今後の私学の運命

18 歳人口の減少による影響は徐々に始まっています。実際に、大学進学率はこの 5 年以上増加していません。また、近畿圏への人口の流入は、流出を下回っています。大学への入学定員と、大学への進学率が変わらないと仮定したときの私立大学の将来像を描くことが出来ます。

近畿圏（滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山）の 18 歳人口は、2018 年は 197547 人、2023 年は 175941 人、2028 年は 174191 人と予想されています。大学への進学率が現状の 53.8% と仮定すると、2018 年に関西の大学に進学する高校生は約 12 万人になります。一方、近畿地方の入学定員は国公立 24 校が 19400 名、関関同立が 25876 名、産近甲龍が 17903 名、その他に中堅私立大・中堅女子大学・医科大学などの専門大学 25 校が約 2 万人と、合計約 87000 名です。残り 33000 名の高校生を残りの 87 校余りの私立大学（定員 37000 名）が取り合うこととなります。2025 年になると近畿圏の 18 歳人口は減少し続け、大学への進学率が上昇しなければ関西の大学に進学する高校生は約 94000 人となり、下位私立大学（定員 37000 名）への入学者数は 7000 名となります。まさしく大学が倒産する時代となります。関西の大学に進学する高校生は、2030 年には約 87000 名、2040 年には約 65000 名となり国公立 24 校、関関同立、産近甲龍の入学定員に近い人数となります。約 110 校余りの私立大学への進学者がいなくなるかもしれません。これに伴い受験者はどこかの大学に必ず入学でき、受験の競争も緩やかとなり、学力の低下は避けられません。一方で、政府は大学生への学費支援を進めています。この政策が大学への進学者の増加につながることを期待しています。しかし、四天王寺大学の約半数の学生が、何らかの奨学金を受給されています。これらの奨学金の多くは卒業後に返済の必要があり、就職後に 10 年以上にわたり給料から返済することになります。大学を卒業する 20 歳過ぎの希望に燃えて社会に出てゆく人たちの多くが負債を抱えていることになり、正直、とっても大変です。

今年のできごと

富田修平

洽楽会誌は、山本研二郎先生の代から続いて今年で第50号の発刊となります。引き続き洽楽会の皆様の近況を連絡し合う交流の場としてこの会誌を活用していくことができると考えています。今後とも皆様のご理解ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

早速、今年も教室のできごとについて述べたいと思います。まず教室員の転入出について。泌尿器科から出向してきていた壁井和也先生が三浦克之先生のご指導のもと学位を取得し、大学院博士課程を修了しました。壁井先生は、持ち前の明るい性格で教室員の心を和ませ、また後輩の学部学生の研究活動への興味を引き出し一緒に実験を行っていた様子が印象的でした。現在は泌尿器科に戻り研究活動も行いつつ臨床復帰しています。また塩谷一史君が無事、大学院修士課程を修了しました。毎日泉南から通学して、教室では塩田正之先生の心のこもった厳しい指導のもとで成長する姿が印象的でした。現在は試薬販売メーカーに就職し、時々仕事上のお付き合いとして教室にやってきます。また、秘書の藤田明子さんが退職されました。前任の岩尾洋先生の代から勤めていた藤田さんには洽楽会に関することを含め多方面で助けていただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。今は子育てを中心にご多忙の毎日と伺っています。現在の秘書の都志由架さんにスムーズにバトンタッチしていただき何も支障なく教室の事務処理が行われています。また、9月には、北島正二郎特任講師が慶應義塾大学先端生命科学研究所に転出されました。北島先生との研究でのディスカッションは大変印象深いものでした。研究課題における本質を議論することは重要ですが、北島先生はそれを導く糸口を提供していただけることができる人物です。現在も癌幹細胞、代謝性ストレス応答をキーワードに研究を進めているようです。北島先生の研究が益々発展することを祈念しています。

また、着任以降の初めての大学院生として泌尿器科学から西出峻治先生が研究に参加しています。現在2年と2ヶ月の研究歴ですが、その間、松永慎司講師の下で指導を受け、これまでの研究成果について論文原稿を執筆中です。昨年着任した山口雄大助教は、独自の研究分野を切り開くべく日夜努力を重ねています。まだまだ未熟な教室ですが、「山椒は小粒でもぴりりと辛い」研究のできる教室にして参りたいと思います。引き続き洽楽会の皆さまにはご指導ご鞭撻賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

皆さまにおかれましてはよいお年をお迎えくださるようお祈り申し上げます。

ある老医の余暇の過ごし方

岸本武利

秋も深まってくると中学校、高等学校、大学などの同窓会の招集案内が届く。現役中は即ち65歳まではどの同窓会もそんなに開催されていなかった。開催されたとしても忙しく参加出来なかったと記憶している。定年以降は同窓会の開催も多くなり70歳を超えてくると年1回となり、それに加え仲の良かったGroupとの会合も増えてくる。仕事を辞め付き合いが狭くなり余暇が増えると昔が懐かしく、利害関係のない同窓会が楽しみになるのだろうと思う。同窓会は時・場所の設定、案内状発送、住所録作成など面倒な事務を進んで世話をしてくれる人が居ないと開催することは不可能である。事実、高等学校の場合世話人代表が病に倒れたことから傘寿の会を最後とし、残った会費の一部は大阪腎臓バンクに寄付して頂いた。今年は11月の初に中学校、大学医学部の同窓会が開かれ人それぞれの近況報告に加え昔話に興じた。中学校の同窓会には年々女性の参加の割合が増え同席する男性より若く見え活力もあるように感じられる。伴侶をなくした男はショボク女はイキイキ自由と余暇を満喫しているようだ。

高齢男性でも退職するに当たっては安ど感とともに一抹の寂しさがある、これからは自由で好きなことができ余暇余生を楽しく過ごすことが出来ると淡い期待もあるが、それを充実感を持って出来ている人は少ないと思われる。いざ退職してみると趣味に興じる時間に限りがあり余暇を持て余す。同席した男どもの余暇の過ごし方は様々で、自営業をしてきた方は徐々に後進に仕事を譲りながらうまく余暇を作りメリハリのある生活を楽しむことが出来ているようだ。退職後料理学校に通い家事万端が可能で何時でも独り立ちできる者、80歳になりパソコン教室に通い始めた者、身体が頑健なゴルフ狂は週に1-2回ゴルフに出かけ倶楽部の公式競技に優勝したりAge shootを何度も達成した強者もいる。また週何回か種々のボランティア活動に参加することで地域社会に貢献されている方もおられる。一方これだと言った趣味を持たず何と無く過ごしている輩も多い。この歳で同窓会に出席できるような人達は軽度の認知障害を含め2-3の身体的問題点を抱えながらも行動意欲があり移動能力を保っている人達で、身体活動能力の維持を図るため毎日しっかりとWalkingするなどの努力を行っているようだ。筆者は満80歳をもってそれまで勤めていたクリニックを退職、ゆっくりとゆとりのある生活を楽しみ、週に1度は近くのゴルフ場に出かけたいと思っていたが、いざそうなると週日には適当な相手が見つからないことやせつかく同門の若い人が誘ってくれてもたまたま天候が悪かったり体調が良くなかったりと、無理までしてやることでないと断ったりしているとだんだん足が遠のいてしまった。ただ健康維持のため歩数計を身に付け毎日8千歩以上を目指して体を動かすことを心掛けていること、またFitness clubに週に3回

ほど出かけ1-2時間体を動かした後 Sauna を楽しんでいる。Fitness club の会員も高齢化が進み、中には Club に毎日決まった時間に来られ運動はせず入浴とお茶や新聞・雑誌を時には昼寝を楽しんで半日ほど過ごされて居られる方も居られる。筆者は会員になってから久しいがお互いに顔を見知っているが挨拶を交わす程度で名前や専門分野については知らない。このような縛りや目標のないぐうたらな生活を半年ほど続けていると、そこそこ体を動かしているにもかかわらず肉体的にも精神的にも不調を来し、これではダメだと思いある病院に半ば頼み込むようにして週1回の慢性腎臓病 (CKD) 外来担当と CKD 患者教室の手伝いなど顧問的な仕事をさせて頂くことにした。若い Comedical staff との交流は楽しく CKD 患者さんの相談相手もまた楽しいが患者さんを診る責任の重さを改めて感じている。しかし若い先生方や Staff の邪魔になら無い様にと肝に銘じている。このように再び Professional として社会と関わることにより生活にリズムと張りができ生き甲斐が生まれる。

筆者は昭和 37 年に本学医学部を卒業 1 年間の Internship 履修後、第一内科に入局した、当時の医局長に「お前は今まで何を学んできたのか」と罵倒され、自分でもそれを感じていた。第一内科に属され薬理学講座の大学院生であった先輩に相談したら、ご自身の体験から、もう一度しっかり基礎医学を身に付けてから臨床をおこなっても決して回り道ではないと薬理学教室入局を勧められた。当時の薬理学講座教授は故大阪市立大学名誉教授上田重郎先生で相談に上がると暖かく対応していただき直ちにお世話になることになった。そして生理学・薬理学実験法をみっちり教えていただいた。そして元大阪市立大学学長、大阪市立大学名誉教授山本研二郎先生にも何かとご指導も頂き「腎循環に関する生理学的・薬理学的研究」で学位を頂くことができた。泌尿器科学教室に移籍後もそれまで一緒に共同研究をしていた香川大学医学部薬理学講座教授現名誉教授安部陽一先生との交流を続け、先生には私に代わって泌尿器科の若い先生の学位の指導をしていただいた。なんとお礼を申し上げてよいか終生頭が上がらない、改めて衷心より感謝申し上げたい。泌尿器科の臨床ではそれまでの研究実績を活かし末期腎不全対策 (透析医療、腎移植) に力を入れてきた。大学定年退職後も末期腎不全対策に関連した仕事に就き、社会的にも公益財団法人大阪腎臓バンクの設立時の評議員そして理事、副理事長、理事長を経て現在会長を仰せつかっており、慢性腎不全医療の質の向上と普及、特に献腎移植の推進に多くの方々の賛助を得ながら尽力している。そして個人としては現在先述したごとく CKD 患者さんの病勢進展防止に病院内関連部門の協力を得て立ち上げた CKD サポートチームの一員を務めている。どれほど医療と福祉に貢献できるか？自己満足にすぎないと思われるが自分では最高の余暇・余生の過ごし方だと幸せに思っている。いつまで続けられるか・・・

「その後」の私

池本文彦

私は平成元年末に薬理学教室を去り、東京の萬有製薬株式会社（現在 MSD 株式会社）の薬理部長として迎えられました。ほどなく筑波研究学園都市に新設されたつくば研究所創薬研究所副所長に、次いで埼玉県の開発研究所に異動となり、すぐに取締役として開発研究所（安全性研究、開発薬理研究、薬物動態研究、製剤設計と治験薬製造）や愛知県岡崎市の合成化学研究所など合わせた総合開発研究部門統括の業務を受け、2002 年に取締役任期を終えたあとも 2004 年まで同社臨床開発担当顧問を受け、大学や医療研究機関などの臨床研究の設計、実施、解析、論文作成などの支援へ、と基礎から臨床へ業務を一転しました。

その後は医療、医薬開発を目指すバイオベンチャーを支援する企業財団の顧問として新規研究にチャレンジする方々への助言など行い、また武蔵野大学薬学部の客員教授に任じられました。このようにさまざまな人的及び組織的ネットワークの中で、2011 年には東京大学医学部長の御指名により東大医学部学内公開講座「医の原点」の講義を引き受けたり、また一方では横浜市立大学大学院医学研究科臨床医学研究講座の講義「臨床研究概論」を約 5 年間続けたり、京大再生医科学研究所の中辻憲夫所長（日本で最初にヒト ES 細胞株を樹立した人）が進める NEDO 研究、「ヒト ES 細胞からの創薬基盤研究のためのモデル細胞の創製」の倫理委員会委員長を引き受けもしました。でもさすがに 2014 年秋の横浜市大講義を最後に終了し、その後は無職老人です。ここでは私が薬理をはなれてからの逸話を少し、手短かに紹介させていただきます。

萬有製薬

私が勤務していたころの萬有製薬は外資系日本企業でメルク社に株式の過半数を所有されていました。その魅力は世界トップレベルの新薬を日本で誰より先に扱って研究と開発ができることです。ロサルタンは当然で、骨粗鬆症薬アレンドロネート、ロイコトリエン系抑制のモンテルカストなど薬理的にとっても面白い薬物です。それでも日本での製造販売承認をとるためには「日本の薬事規格に合うだけでなく日本人患者が使いやすい薬剤」として仕上げる必要がありました。違いはいろいろありましたが、例えば日本の患者が無理なく服薬できる円形錠の最大直径は 10 mm としていたのに対してアメリカではさらに大きいもの

があり、日本の患者は困る、と言うのもありました。また、医薬品の有効性と安全性の担保は当然ながら、「なぜそのような効果が発揮できるのか？」の細かい薬理学的理論を求められましたし、添加物などは日本では食品には使えても医薬品成分と承認されていなければ使用は認められません。私も結構カンシヤク持ちで、アメリカと日本は違うのだ、とメルクと正面切っての大喧嘩は日常茶飯事でした。科学は世界共通とはいえ、医療では民族、文化の違いが反映されます。このことを彼らに分からせるのは大苦勞でした。

企業では私のようにすぐれた薬理学効果を持ち、しかしまだ本質のすべてが明らかになっていない化合物に出会えることが喜び、と感じる者はむしろ少なく、海外導入品の扱ただけでなく、自分の手で新薬を作り自社新薬に仕上げたい、と多くの研究者は望みます。それは良いのですが、先頭に立ったのは若い研究者にその機会を与えてやるのが本来の立場であるべき当時の専務取締役研究開発本部長（某有名大学医学部教授を退官してきた方）でした。その人が自分の考えで新薬を作り上げる、と言うのです。もちろん自分の大学時代の分野からの出発でした。実務は研究員達に命じ、ともあれ候補品まで進んだ化合物が出来たのですが、その物質の安全性試験を担当した私達のグループは、少なくとも動物では重篤な副作用をもたらす、と気がつきました。これに基づき私たちは臨床試験までの進捗計画をもう一度考え、ヒトでの安全性担保についてさらに詳細な検討が出来るまで一旦立ち止まるべきであると主張しました。動物で強力な毒性を発揮してもヒトに用いることができる場合もある、ということはワルファリンの例にもあることはみなさまご存じですが、それは決して一般的ケースではありません。ともあれそれだけの慎重さは当然必要なのですが、開発推進の直接指揮をとっていたのはこの本部長です。私達の意見を受け入れて再度詳細な評価試験や社内議論をするどころか逆に部門責任者の私と大喧嘩になりました。ついには「開発妨害をするお前なんか辞めさせてやる」、「何を言うか、言われなくても辞めてやる」、の大騒動となり、その場で私物を車に積み込んで帰宅すべく車のエンジンを始動させた私のところに研究所長の西村暹博士（tRNA の構造研究の世界的権威）が飛んでこられて私の腕をつかみ、「ちょっとだけ待って、池本さん」、と言われたので踏みとどまりました。だって tRNA の西村先生と言えば私などから見れば神様みたいな方です（でも気さくに昼食を一緒にしておしゃべりしましたが）。それで問題は社長、会長へと届き、結局は所長と社長、

会長の判断があり、すぐ後に私達の主張に合致した結果が出て、「辞めたのは」専務取締役本部長でした（笑）。その後任となられたのは医学者、特に薬理学者ならご存じの明楽泰先生（ジギタリスの強心作用のメカニズムを証明された方）で、専務取締役、後に副社長研究開発本部長として見事に研究開発をリードされました。

研究とは無関係のお話しです。研究所長時代はメルクへの頻繁な出張でした。アメリカではケネディ空港までメルク契約のリムジンが迎えに来て、帰りは前泊するマンハッタンまで送ってくれます。ここで突然ですが、私は昭和 20 年に小学校に入学し、その夏にアメリカ空母から発進した戦闘機の機銃掃射を受けました。第一連射では当たらず、急旋回、超低空で第二連射に入る直前、防空壕（若い先生は知っているかな？）に飛び込みました。あとで出てみると厚さ 2 cm 弱の檜の扉に機銃の弾丸が刺さっているではありませんか。年月が経ちメルクでの会議を終えてフィラデルフィア郊外の研究所からニューヨークに戻るにはハイウェイで 2 時間余です。運転手が退屈紛れに話しかけます。「だんな、あたしゃ本職は高校の先生なんです」「うん、今日は講義がない日かね」「ええ、日ごろは歴史教えてるんだ」。つづけて「歴史って言やあ太平洋戦争ですわ。生徒たちにね、日本は世界を相手に無茶をして、あげくに規則を破っていきなり真珠湾を攻撃したってね。でもさあ、あとで原爆を落とされてめっちゃめっちゃになって結局負けちゃっただろ、この話をしてやるんでさあ」。私はカッと来ました。運転手に「おい、それでお前さん、従軍経験あるのかね？」「いや、いくら何でも当時はまだ生まれてなかったなあ」。おいでなすった、とばかり私、「1945 年、つまりね、原爆を落とされた年だ、私は小学校 1 年生だったぜ。だから戦争体験があるのだ」。彼の態度が変わります。「はあ、どんなのでした？」「その年の 7 月、私が 1 年生で 6 歳だ。アメリカの戦闘機が庭で遊んでいる私めがけて超低空までダイビング、いきなり機銃で撃ちやがったよ。狙い撃ちさ、まるでウサギ狩りのハンターのようにね。戦闘機の高度は 20m くらいだったろう」「うーっ、そ、それで命中したのですか？」「バカ、あの時命中していたら今お前さんの後ろに乗っているのは何だ？俺は幽霊か？」。運転手のハンドルが突然大きく揺れ動き、時速 120Km 以上（80mph 程度）は出ていたろう車がレーンを越えて大蛇行です。「コラッ危ない！！ハンドル握って真っ直ぐレーンを走れ！」そう叫ばなかったらあと少しで道路端のコンクリート壁に車体を叩き付けていたでし

よう。それからそのおしゃべり運転手は黙ってしまいました。私は最後に付け加えてやりました。「6歳の子供を目標にウサギのように射殺しようとしたパイロットの顔を俺は今も忘れないね。ヘルメットの中は丸顔の男だった」。運転手はその後一言もしゃべらず、その夜宿泊するホテルまで送ってくれました。もちろんその時はこちらもチップなどやりません（笑）。でも、これで彼の学校での戦争についての講義が少しでも変わると良いなあ、と帰途につきました。

萬有以降の研究活動

最初に書いたように私は萬有製薬を退任してから、東大と横浜市大での講義などを引き受けてきました。それにはこれまでの長い基礎研究経験だけでなく、会社で体験した臨床試験（治験）や治験以外のさまざまな臨床研究に携わった経験が東大や横浜市大での講義に生きたように思います。東大での「医の原点」の講義ならびに横浜市大での臨床研究講義を中心にまとめたものは、平成30年の洽楽会で富田教授に初めてご挨拶したのを縁に、それを先生に差し上げましたところ有難くもこれを分子病態薬理学講座のホームページに掲載して下さいました（「洽楽会」のなかの「会誌」に続く「寄稿」）。ご興味のある方はご覧くだされば嬉しいです。その中では医学研究者であるなら必要なこと、特に「正しい研究」の重要性を語ってきたことは申し上げるまでもありません。

今の心境

今考えると私が約80年の人生で得られたものは具体的に何もないようです。ただ、上田重郎先生の門を叩いた時から得てきた「人とのつながり」が唯一無二の財産となりました。洽楽会が特にそうです。そうして人とのつながりは高血圧（「池本文彦：血圧,19:830,2012」を参照してください）だけではなく、東京ではこの地の文化の特徴として人から人へ、と人脈が広がってゆきました。お金に換え難い私の財産です。ただ、残念にも今の住処は毎日赤城山を眺める北埼玉、大阪からは遠く離れた地です。私は天満で生まれ天神様に宮参りをした大阪の人間ですが昭和20年3月14日の大空襲を境に二度と大阪に帰ることもできなくなりました。今は「どうもこれは長い夢の世界かなあ、何かの間違いで出来てしまった人生かしら？」の心境です。それで次のものが私の辞世です。

「赤城山雪踏み分けて落つ武者の心には在り淀の川霧」。

市大薬理で学んだ腎臓薬理を薬科大学で継続でき、
退職後自らのプランで国内外の街歩き屋に

玄番 宗一

(退職後の資格：総合旅行業務取扱管理者)

はじめに

本誌前号で、安部陽一先生が「喜寿を迎えて」と題して寄稿され、同年齢の「玄番、宮崎両先生の気持ちもおききしたいと思う」と記されました。安部先生は、時には小生が年長と持ち上げることがありますが、実は、1941年の同じ1月生まれながら、僕の生まれが2週間早いにはすぎないのです。本誌への寄稿は初めてですので、読ませてもらうばかりでは申し訳ないと思い一筆取りました。以下で2回分ぐらいの寄稿のつもりです。

大阪市立大学理学部で生物専攻の学生として大学院への進学を決めていた頃に、指導の高田英夫教授（当時）から医学部薬理の上田重郎教授（当時）にお会いするようにとの指示がありました。早速に伺い、山本研二郎先生から腎臓についての大変興味ある話題に関心を募らせたことを思い出します。薬理学講座で初の医学部出身でない助手に採用されました。同講座内で、あえて一人は非医科系の人事をとのご意向であったようです。その後の教育研究を通じて市大薬理同門のご支援を十分に頂くことができました。

在職中薬理同門の先生方からご支援とご配慮

上田重郎先生のもとで利尿薬の生化学的な作用について研究し、学位を申請することになったときには、山本研二郎先生が2代目の主任教授就任直後でした。上田重郎先生への申請が遅れたことを気にしながら、山本研二郎先生に審査をお願いできました。大阪薬科大学に移らないかとのお誘いを市大薬理同門の先輩の藤田直先生から受け、移籍しました。大阪薬科大学でも腎臓薬理の研究で、特に「薬による腎臓への副作用のしくみ」を楽しめました。定年退職まで薬理学関連の講義を約1,600回やりました。その間、安部陽一先生からは香川医科大学の定期的なセミナーの講演者に招いて頂いたり、宮崎瑞夫先生からは日本薬理学会近畿部会の部会長に推薦頂きました。池本文彦先生が万有製薬の安全性研究所長をなさっている折、大阪からの交通費は出せないが東京に来た折には研究所で所員に講演をやるようにと招かれました（同門ならではの気安さでしょうね）。三浦克之先生には無理を承知でお願いし、大阪薬科大学の大学院生向けの「医薬品副作用学」特論を夜間開設にも関わらず高槻の阿武山までおいで下さり講義を続けてもらったこと、岡村富夫先生が近畿部会

の会長の折、評議員会中に、若手へのランチョンセミナー(演者：西山成先生)を企画され、その座長に指名下さったことなどに加えて、それ以外にも市大薬理の同門の方々からは、数々のご支援やご配慮を頂きました。

定年退職後には「旅」で生きようと考えました

定年退職後は、毎日が大型連休であり、日々の過ごし方を考えました。学生時代から山歩きや旅が大好きでしたので、本格的に旅で過ごす人生を志しました。僕の旅の立案や実践のレベルの確かめを兼ねて、横浜薬科大学を71歳で退職を機に、6か月後に「総合旅行業務取扱管理者」試験に挑戦し、その資格を得ました。観光庁長官や知事の許可を得て旅行業を営業できる資格です。ちなみに、旅行会社の店頭や店内の旅行パンフレットを手にとって、裏表紙をみれば、旅程の企画や実施の責任者として、この資格名と氏名が必ず記載されているはずです。

旅は、日常から離れて、異文化や自然に触れ、目、耳、口、手や足を大変刺激し、僕の脳細胞をすごく活性化させます。一人でも旅できますが、退職後は、妻(関西医大定年退職は、僕と同時期だったのですが、妻は週の半分は複数の非常勤職の仕事を続けています)と、共同の旅を心がけています。妻は退職後、水彩画を描き始め、特に旅先で出会った心に残る情景を、水彩画に残しています。28作品を描きあげると、「～ちょっと楽しんで！世界旅を水彩画で～」などの個展を、京阪電車樟葉駅(特急停車)に隣接の「くずはアートギャラリー」で、すでに4回開催致しました。一回の会期6日間を通じて、1日当たりの平均来場者は約130名と、好評を得ているようです。岸本武利先生や宮崎瑞夫先生にもご来場頂きました。僕は、画題探しの旅の企画・実施に加えて、水彩画展の広報、会場準備や「画集」の作成に、協力をしています。

第4回水彩画展の「画集」は本誌を読まれる頃には出来上がっていますので、「画集」をご希望方にはお届けします(無料)。gembam@zeus.eonet.ne.jpへお名前と送付先(住所)を記載したメールを遠慮なく送って下さい。

海外旅行を楽しむ

妻の希望も聞いて、旅のプランを立て、出かけます。今年の2月にはペンギンを観たいとのことで、メルボルンへ行き、妻は、夕方海から海辺の巣に戻る「ペンギンのパレード」などを描きました。3月には中国四川省成都へ出かけ、たくさんのパンダを観て、妻は「パンダの幼稚園」などを描きました。

旅の立案は、①まず、目的地への各社の航空便の利便性とその正規割引運賃額をwebで検索します。旅行会社は個人旅行向けに格安航空券を販売していますが、航空会社から直接に正規割引運賃(PEX運賃)で購入しても、ほとんど

差はありません。パソコンを使って正規割引運賃で予約購入すると、その場で希望の席を事前に指定できます。但し、多客期には航空会社によっては、それが出来ない場合もあります。長時間のフライトの場合、窓から3列席の窓側席は通路へでるのが一苦労ですので、避けています。また搭乗後に予約時に入力した会員番号に（同じ航空連盟、例えばANAの会員はスターアライアンス、JALの会員はワンワールドに加盟の航空会社の）搭乗マイルが加算されます。メルボルンへはマレーシア航空を利用し、往路クアラルンプールに立ち寄り（ストップオーバーし）ました。成都へは、スカイチーム（デルタ航空を中心とする航空連盟）のマイルを利用し、中国東方航空による杭州、成都、上海（関空発着）のすべての経路を無料特典航空券で旅できました。

②航空便の次にホテルの検索し予約します。到着地の都市内で空港からアクセスが便利で、鉄道・地下鉄の駅などから徒歩圏内のところを選びます。僕は複数のホテル系列の会員ですので、できるだけ会員割引を利用し、また会員証へのポイント加算を得ます。前述の中国の旅では、宿泊の約半数のホテルではポイントによる無料宿泊特典を利用しました（シェラトンやウエスチンなどのSPG系列）。なお、海外のホテルではシャワーがあってもバスタブ（風呂）のないことがあります。予約時にバスタブ付きであっても現地ではそれが無いことが多いので、チェックインの際に確かめて交渉してください。海外のホテルでは、室内にスリッパ、パジャマ、髭剃りや歯磨きセットを備えてないことが多いので、持参したほうがよいでしょう。トイレには、日本では常設の温水洗浄装置はありません。それが必要な場合には、国内で、携帯ウオッシュレットで検索して購入し持参したらどうでしょうか。

③ヨーロッパ圏内のように足の便が大変良いところは、移動に鉄道・地下鉄を利用します（日本出国までにレイルパスを購入することがあります）が、非常に交通の利便性が悪いところや、治安のよくないところでは、webであらかじめ現地ツアーを予約することがあります。日本語ガイドは英語ガイドに比べて、やや費用が高くなります。現地でグレイラインの営業所があれば、ツアーでは各国人の乗り合わせでおもしろいですよ。

米国西海岸オレゴン州ポートランドでは消費税がなく市内を縦横に走る市電は全線無料、メルボルンでもすべての市電が無料で、ものすごく便利です。

④目的地を決める際には、年間の気象事情を調べてください。できるだけ乾季を選び、雨季は避けてください。東南アジアでは雨季（スコール）には道路が不通になる場合もあります。気温も考えましょう。今年の8月に長女の夫婦・孫娘と一緒にシンガポールに滞在の後、オーストラリアのケアンズへ飛びました。南半球ですので冬季でしたが、ケアンズは南緯16度あたりですので熱帯圏になり、冬季ながら気温（最高20度余り）は快適でした。ケアンズへ

の旅はおススメです。人口約15万人ぐらいでしょうか、整った街並みはサンゴ礁の海に面し、背後は熱帯雨林（ワラビーなどの野生動物に出会えます）が広がります。関空からジェットスターによる直行便が就航しています。ジェットスターはカンタス航空の子会社で、運賃は安いのですが、サービスは決して期待しないで下さい。

海外個人旅行でトラブルに対処

海外でトラブルに会わないように心がけても、避けられないことがあります。その際の対処も考えておきましょう。

- ① 海外では、飛行機やホテルのオーバーブッキングはしばしば起こります。代替条件でねばってください。
- ② 盗難（置き引き・ひったくり）が多いので、ショルダーバッグはタスキ掛けや、歩道を歩くときは車道や自転車道から離れて商店側を歩くなどの配慮をすればよいでしょう。パスポートを紛失すると、すぐには帰国できません。パスポートのコピーと写真の控えを用意しておくこと。僕は、滞在中パスポートなどの貴重品はホテルの室内の金庫に保管しておきます。Bクラスのホテルでは客室内に金庫のないことがあります。ホテルの予約の際に、室内設備でチェックしてください。
- ③ 交通事故に気を付けましょう。日本や英国圏（オーストラリアやニュージーランドなど）では、車は左側通行ですが、おおくの国は、車は右側通行です。道路を横断の際、日本とは逆で左側を先に確認して下さい。日本の習慣で右側を確認後、車道に一步踏み出すと危険です。ヨーロッパの多くの都市では市電が歩道すれすれで走ってることがあります。市電はかなり狭い通りでも走っています。僕はスイスの首都ベルンの街並みに魅せられて、狭い通りの真ん中に出て写真を撮りました。ふと振り返ると、僕のお尻すれすれに市電が静かに止まっており、市電の運転手が、驚いている僕の顔を見て笑っていました。また、歩道に隣接して車道との間に自転車専用道があれば、自転車が高速で走ってきますので、くれぐれも自転車専用道に入らないでください。
- ④ タクシー料金のトラブルも頻発です。乗車後すぐに料金メーターの稼働確認をしても、走行中に料金メーターの表示が突然消え、3倍ぐらいの料金を請求します。実は3倍請求されても日本国内のタクシー料金よりの安いのですが、応じないと目的の手前で降ろされるような嫌がらせを、マニラなどで受けたことがあります。
- ⑤ 海外ではトイレが少なく、ほとんどが有料ですので、コインをいつも持参するなど。イタリアのローマ・テルミニ駅のトイレは非常に立派です

が、2ユーロのコイン1枚を挿入しないとゲートのバーが開きません。ある時、旅行中の婦人がゲートの前で困っておられましたので事情を聴くとコインを持ち合わせていないとのこと、早速に僕のコインと両替し、大変喜ばれました。イタリアのヴェネツィアへ行き、エーゲ海クルーズに乗船し、クロアチアの寄港地ドゥブロブニクで散策の折、トイレのゲート前で現地通貨のコインがなく（寄港地下船時、現地通貨に両替するのですが、少額にとどめたところ、コインの持ち合わせがなく）、近くで釣銭にコインが入手できるようにソフトクリームを注文して、トイレへ急ぎました。

海外では、このようにトイレのみならずチップにもコインや少額の紙幣が常に必要です。十分に用意してください。僕は、1ドル紙幣やコインをいつもかなり持っています、

最後に蛇足ながらご参考までに

来年(2019年)の2月にはインド（ムンバイ・デリー）に、3月にはミャンマー（ヤンゴンとその周辺）へ、妻の水彩画の画題探しを兼ねて、旅プランを考えています。

そこへ、次のゴールデンウィーク（4月末から5月初めにかけて）は10連休とのことで、次男夫婦と、ヨーロッパへでかけることにしています。

この原稿を仕上げる直前（11月上旬）に、関空からヨーロッパ便を検索したところ、直行便の航空運賃（PEX運賃）が通常同時期の2～3倍ぐらいなので驚きました。ものすごく高いです。格安航空券のサイトでも同様に高いですね。例年と違って、法令で10連休と定めたことで、ヨーロッパのような遠方でも旅行客が多くなるとの予想が影響しているのでしょうか。いろいろの航空会社を検索、関空からヨーロッパ直行便あきらめ（web画面で2都市以上または周遊を選択）し、結果として、韓国のアジアナ航空で、ヨーロッパ周遊の経路決め、フランクフルトからソウル乗り継ぎで関空へ帰国する予定です。何とか、他社よりも安かったことでホットしています（運賃としては高いことにまちはないのですが、他社より安いという気持ちの問題でしょうね）。

薬理同門会の方々には、海外経験が多いでしょうから、少々書きすぎたかもしれません。日常を離れて、時には、旅を楽しんでください。

僕は、新年には、年齢78で、聴力の低下は顕著であり（海外の旅先で英語が半分聞き取ればよいと思いながらも）、後期高齢のためか、足腰の劣化が進行中なのですが、旅への気力で支えています。

企業から大学へ 定年後の転身

田中基晴
常磐大学人間科学部健康栄養学科

今回、洽楽会誌に寄稿する機会を与えて頂き大変光栄に思っております。富田先生、ありがとうございます。また今年の6月には洽楽会で教授就任をお祝い頂き感謝申し上げます。池本先生、洽楽会では過分な御紹介ありがとうございました。

私は薬学の修士課程を修了後に薬理学教室に博士課程の院生として入らせて頂きました。池本先生に直接御指導頂き、実験手技はもとより論理的な考え方を学ぶことができました。その後会社で薬理を研究していく基礎になったと思います。また当時教室の教員として岩尾先生、雪村先生、三浦先生がおられ、折に触れてアドバイスを頂きました。「タナッピ！」という呼び声が今でも耳に残っています。また洽楽会でも申し上げましたように山本先生にランチタイムセミナーで雷を頂いてからは、十分に理解してから説明するように心がけています。私の説明はまだまだではございますが、この時を機に多少なりとも向上したのではないかと思います。また卒業に際して山本先生から食事にお誘い頂きました。頂いた言葉は、「会社で質問を受けたら、誰であってもきっちり調べて答えなさい。」というものでした。時に忘れることもありましたが、おおよそ対応してきたのではないかと思います。

長年勤務したノバルティスファーマ株式会社は昨年の6月末で定年を迎え、その後も継続して(公財)ノバルティス科学振興財団の事務局長という立場で勤務しておりました。今年2月にもノバルティスホールディングの社長から「居たいだけ居てよい。」というありがたいお言葉を頂いたばかりでしたが、事務局で、しかも毎年繰り返す仕事はあまりなじめませんでした。大した能力はないのですが、やはり長年業務としてやってきた薬理などの文献を読んだり考えたり、まとめて話したりすることに興味を感じておりました。今年3月に阪大の坂口志文先生と今回ノーベル賞を受賞された京大の本庶佑先生を演者として迎え財団設立30周年記念式典を無事開催できましたので、4月からの大学への赴任は結果的には丁度良いタイミングだったと思います。

大学の仕事は会社とは随分異なり慣れないことも多かったのですが、同僚に教えてもらいながら少しずつ分かって参りました。AO入試の試験官をやったり、学生の親と面談したり、今までと逆の立場になるのは奇妙な感覚です。裁量権が大きくなり、「えっ？」自分が判断して良いのかな、などと考えてしまいます。

また、会社では外部への発信は滅多に許されませんが、大学ではむしろ積極的に発信することを要求されます。様々な業務(雑用?)をこなす必要はありますが、自由度が高く、学生の反応もあり大学の方がやりがいを感じています。学生の卒論は実験をせず文献をまとめる程度ですが、様々な学生がいて苦労もある反面楽しみでもあります。今任されている公衆衛生という学問は大学で習って以降特に勉強したことはなく、現在の知識では全体をカバーできず当初勉強が必要でした。やっとほぼ把握できるようになったかと思います。長らく取り組んできた生命科学を教えたい気もありますが、これはこれで私自身視野を広げる良い機会になったと捉えています。また在籍する健康栄養学科は管理栄養士養成学校でもあり、食を科学します。自身の健康を考える際に食を意識してきたので学ぶ良い機会でもあると考えています。なお、研究を求められておりますが、田舎の私学で研究費に乏しく研究らしい研究ができず共同研究できる方を探しています。心当たりがございましたら御連絡いただけると幸いです。まだまだ向上したいと思っています。

最後になりましたが、分子病態薬理学教室の今後益々の御発展を祈念致しますと共に、山本先生始め皆様の御健康をお祈り申し上げます。

第 25 回市大フォーラム

2018年8月8日(水)、あべの貸し会議室 リンク大阪 竹澤ビル9階 Room Aにおきまして、市大フォーラムを開催致しました。皆様のお陰を持ちまして、御出席者34名、発表演題11題の盛会となりました。今年は稀に見る猛暑の中、また遠方より御参加いただきました先生方、誠にありがとうございました。

***プログラム (敬称略) ***

12:30-12:40 開会宣言

座長：池田 康将 (徳島大学大学院医歯薬学研究部 薬理学分野)

1. 12:40-13:00 徳島大学大学院医歯薬学研究部薬学域 医薬品機能生化学分野
中山 卓
 α -TC のグルカゴン分泌における SGLT2 阻害薬の影響
2. 13:00-13:20 徳島大学大学院医歯薬学研究部薬学域 医薬品機能生化学分野
井上 陽加
マウスにおける亜硝酸塩の脂肪組織への影響
3. 13:20-13:40 三重大学大学院医学系研究科 統合薬理学
島田 康人
ゼブラフィッシュを用いた内臓脂肪量を減らす成分の探索

座長：松永 慎司 (大阪市立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学)

4. 13:40-14:00 徳島大学大学院医歯薬学研究部 薬理学分野
津田 達哉
皮弁生着における血管内皮細胞 ERK5 の役割検討
5. 14:00-14:20 徳島大学大学院医歯薬学研究部 臨床薬理学分野
今西 正樹
大腸がん増大におけるがん関連線維芽細胞由来 ERK5 の役割

6. 14:20-14:40 関西医科大学医学部 iPS・幹細胞再生医学講座
角出 啓輔、人見 浩史
A revised road map for the commitment of human cord blood
CD34-negative hematopoietic stem cells.

14:40-15:00 BREAK

座長：中野 大介（香川大学医学部 薬理学）

7. 15:00-15:20 大阪大谷大学薬学部 臨床薬理学講座
下川 隆臣
LPS 誘発性急性腎障害に対するヨヒンビンの効果
8. 15:20-15:40 大阪市立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学
山口 雄大
DPP-4 非依存的な Linagliptin の心リモデリング抑制効果
9. 15:40-16:00 鳥取大学医学部 薬理学・薬物療法学
三明 淳一郎
心血管疾患に対する新規治療法の開発への挑戦
10. 16:00-16:20 三重大学大学院医学系研究科 統合薬理学
西村 有平
肺高血圧の新規病態メカニズム解析

座長：富田 修平（大阪市立大学大学院医学研究科 分子病態薬理学）

11. 16:20-16:50 香川大学医学部 薬理学
藤澤 良秀
わが人生、機器センターと 30 年

16:50-17:00 閉会宣言

論文業績 (2018 年)

1. Imano H, Kato R, Tanikawa S, Yoshimura F, Nomura A, Ijiri Y, Yamaguchi T, Izumi Y, Yoshiyama M, Hayashi T. Factor Xa inhibition by rivaroxaban attenuates cardiac remodeling due to intermittent hypoxia. *J Pharmacol Sci.* 2018. 137: 274–282.
2. Savitskaya A, Nishiyama A, Yamaguchi T, Tateishi Y, Ozeki Y, Nameta M, Kon T, Kaboso S A, Ohara N, Peryanova O V, Matsumoto S. C-terminal intrinsically disordered region-dependent organization of the mycobacterial genome by a histone-like protein. *Sci. Rep.* 2018. 8: 8197.
3. Inoue M, Niki M, Ozeki Y, Nagi S, Chadeka E A, Yamaguchi T, Osada-Oka M, Ono K, Oda T, Mwendu F, Kaneko Y, Matsumoto M, Kaneko S, Ichinose Y, Njenga S M, Hamano S, Matsumoto S. High-density lipoprotein suppresses tumor necrosis factor alpha production by mycobacteria-infected human macrophages. *Sci. Rep.* 2018. 8: 6736.
4. Kitajima S, Lee KL, Fujioka M, Sun W, You J, Chia GS, Wanibuchi H, Tomita S, Araki M, Kato H, Poellinger L: Hypoxia-inducible factor-2 alpha up-regulates CD70 under hypoxia and enhances anchorage-independent growth and aggressiveness in cancer cells. *Oncotarget* 9:19123-19135. doi: 10.18632/oncotarget.24919 (2018).
5. Tsounapi P, Honda M, Dimitriadis F, Shimizu S, Shiomi T, Hikita K, Saito M, Tomita S, Sofikitis N, Takenaka A. Antioxidant treatment ameliorates the diabetes-induced dysfunction of the vas deferens in arat model. *Andrologia* 2018;50
6. Kabei K, Tateishi Y, Nozaki M, Tanaka M, Shiota M, Osada-Oka M, Nishide S, Uchida J, Nakatani T, Tomita S, Miura K. Role of hypoxia-inducible factor-1 in the development of renal fibrosis in mouse obstructed kidney: Special references to HIF-1 dependent gene expression of profibrogenic molecules. *J Pharmacol Sci.* 2018 Jan;136(1):31-38. (2018)

7. Osada-Oka M, Hirai S, Izumi Y, Misumi K, Samukawa K, Tomita S, Miura K, Minamiyama Y, Iwao H: Red ginseng extracts attenuate skin inflammation in atopic dermatitis through p70 ribosomal protein S6 kinase activation. *J Pharmacol Sci* 136:9-15. doi: 10.1016/j.jphs.2017.11.002. (2018).
8. Kashiwagi S, Asano Y, Goto W, Takada K, Takahashi K, Hatano T, Tanaka S, Takashima T, Tomita S, Motomura H, Ohsawa M, Hirakawa K, Ohira M: Mesenchymal-epithelial Transition and Tumor Vascular Remodeling in Eribulin Chemotherapy for Breast Cancer. *Anticancer Res* 38:401-410 (2018).
9. Kashiwagi S, Tsujio G, Asano Y, Goto W, Takada K, Takahashi K, Morisaki T, Fujita H, Takashima T, Tomita S, Ohsawa M, Hirakawa K and Ohira M: Study on the progression types of cancer in patients with breast cancer undergoing eribulin chemotherapy and tumor microenvironment. *J Transl Med.* 16:54 (2018).
10. Asano Y, Kashiwagi S, Goto W, Takada K, Takahashi K, Hatano T, Takashima T, Tomita S, Motomura H, Ohsawa M, Hirakawa K and Ohira M: Prediction of Treatment Response to Neoadjuvant Chemotherapy in Breast Cancer by Subtype Using Tumor-infiltrating Lymphocytes. *Anticancer Res* 38:2311-2321 (2018).
11. Asano Y, Kashiwagi S, Goto W, Takada K, Takahashi K, Morisaki T, Fujita H, Takashima T, Tomita S, Ohsawa M, Hirakawa K, Ohira M: Prediction of treatment responses to neoadjuvant chemotherapy in triple-negative breast cancer by analysis of immune checkpoint protein expression. *J Transl Med.* 16:87 (2018).
12. Takada K, Kashiwagi S, Goto W, Asano Y, Takahashi K, Takashima T, Tomita S, Ohsawa M, Hirakawa K, Ohira M: Use of the tumor-infiltrating CD8 to FOXP3 lymphocyte ratio in predicting treatment responses to combination therapy with pertuzumab, trastuzumab, and docetaxel for advanced HER2-positive breast cancer. *J Transl Med.* 16:86 (2018).
13. Iimori N, Kashiwagi S, Asano Y, Goto W, Takada K, Takahashi K, Hatano T, Takashima T, Tomita S, Motomura H, Hirakawa K, Ohira M: Clinical Significance of the Neutrophil-to-Lymphocyte Ratio in Endocrine Therapy for Stage IV Breast Cancer. *In Vivo* 32:669-675 (2018).

14. Takada K, Kashiwagi S, Goto W, Asano Y, Takahashi K, Morisaki T, Takashima T, Tomita S, Hirakawa K, Ohira M: Novel evaluation scale for QOL (QOL-ACD-BP) in preoperative chemotherapy for breast cancer. *J Cancer Res Clin Oncol.* in press (2018) doi: 10.1007/s00432-018-2670-0.
15. Takada K, Kashiwagi S, Goto W, Asano Y, Takahashi K, Hatano T, Takashima T, Tomita S, Motomura H, Ohsawa M, Hirakawa K, Ohira M: Significance of re-biopsy for recurrent breast cancer in the immune tumour microenvironment. *Br J Cancer* in press (2018) doi: 10.1038/s41416-018-0197-4.
16. Goto W, Kashiwagi S, Asano Y, Takada K, Takahashi K, Hatano T, Takashima T, Tomita S, Motomura H, Ohsawa M, Hirakawa K, Ohira M: Predictive value of improvement in the immune tumour microenvironment in patients with breast cancer treated with neoadjuvant chemotherapy. *ESMO Open* 3(6): e000305. (2018) doi: 10.1136/esmoopen-2017-000305. eCollection 2018
17. 仲谷 薫 「注射用カリウム製剤の安全使用のための取り組み」
18. 仲谷 薫 「安全文化の調査と分析」 (病院安全教育 vol.5 No.6,13-20,2018)

学会・研究会発表 (2018年)

ISN Frontiers 2018, Feb.22-25, Tokyo

The role of HIF-1 in the development of renal fibrosis with special reference to HIF-1 dependent gene expression

Kabei K., Nozaki M., Uchida J., Nakatani T., Tomita S. and Miura K.

18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology, July 1-6, Kyoto

Prolyl Hydroxylase inhibitor repaired chemo-sensitivity through tumor blood vessel normalization in tumor mouse model.

Shinji Matsunaga, Shunji Nishide, Masayuki Shiota, Takehiro Yamaguchi, Shojiro Kitajima, Katsuyuki Miura and Shuhei Tomita.

Dipeptidyl Peptidase-4 (DPP-4) inhibition Attenuates Cardiac Dysfunction after Myocardial Infarction Independently of DPP-4.

Yamaguchi T, Izumi Y, Shiota M, Tanaka M, Osada-Oka M, Matsunaga S, Kitajima S, Miura K, Iwao H, Tomita S.

Hypoxia-inducible factor-1 α ; regulates energy fuel metabolism and mediates metabolic plasticity during ammonia stress response in ovarian cancer stem-like cells. Shojiro Kitajima, Kian Leong Lee, Hiroki Hikasa, Shinji Matsunaga, Takehiro Yamaguchi, Shuhei Tomita, Marito Araki, Hiroyuki Kato and Lorenz Poellinger

The role of HIF-1 in the development of renal fibrosis in mouse UUO model with special reference to HIF-1 dependent gene expression.

Kabei K., Osada-Oka M., Nozaki M., Shiota M., Tanaka M., Tomita S. and Miura K.

27th International Congress of the Transplantation Society, June 30-July 5, Madrid

The new role of HIF-1 in the development of renal fibrosis in mouse UUO model

Kabei K., Uchida J., Tateishi Y., Nishide S., Kosoku A., Iwai T., Kuwabara N., Nakatani T. and Miura K.

3月

- ・ 塩谷一史さんが修士課程を修了されました。社会人として充実した毎日を過ごされることを願っております。
- ・ 泌尿器病態学から出向されていた壁井和也先生が大学院博士課程を修了いたしました。これからも元気でご活躍されることをお祈りしています。
- ・ 秘書の藤田（中尾）明子さんが退職されました。大変お世話になりました。是非また遊びにいらして来てください。



6月

- ・ 洽楽会をあべのハルカス 中華料理 桃谷樓 阿倍野賓筵にて開催しました。今年は岩尾洋先生の古希御祝に田中基晴先生の教授就任御祝にと、盛りだくさんの会となりました。





8月

- ・ 第25回市大フォーラムをあべの貸し会議室 リンク大阪にて行いました。



当日、ご足労いただきました先生方に感謝申し上げます。



9月

- ・北島正二郎先生が異動されました。新天地でのますますのご活躍を祈念しております。

12月

- ・教室のみんなで通天閣周辺を観光しました。
昔ながらの洋食屋さんでカツサンドを食べ、登った通天閣からは市大もよく見えました。



お知らせ

薬理学教室のホームページを開設いたしました。

洽楽会の写真、過去の会誌などがご覧になれます。今後も内容の充実を図ってまいりますので、アドバイスをいただけますと幸甚に存じます。どうぞよろしくお願い致します。

URL : <http://www.med.osaka-cu.ac.jp/dept-pharmacology/>

洽楽会のページに入るパスワードは下記の通りです。

yakur i-ocu1949